

## 第3章 中世の日本と社会 《導入資料解説》

学習をはじめよう 「中世の暮らしと社会」

教科書 p.60-61

📖 学習をはじめよう ～中世の暮らしと社会～



一遍のめいかにいる人はだれだろう。

市ではいろいろな物が売られているね。品物はどうやって運ばれたのかな。

中世の職人たち  
(鎌倉時代の絵巻、鎌倉時代の生活)



上の絵は、11世紀に新しい仏教の布教のために旅をした、一遍の袋を伝える『一遍上人絵伝』の一場面です。この場面では、一遍が市を訪れています。絵の中には、どのような人物が描かれているでしょうか。また、市にいる人たちはどのような様子でしょうか。これから学んでいく中世の人々の様子を見てみましょう。

Q1 一遍は何をしているのでしょうか。

Q2 市では何が売られているでしょうか。また、絵の中で右の④～⑥の職人と関わり合いの深いものを挙げてみましょう。

Q3 中世にはどのような人々が活躍したのか予想してみましょう。

60 第3章 中世の日本と世界 学習をはじめよう 61

### 教材の位置づけ

「学習をはじめよう」では、章の学習への動機づけとして、絵画資料の観察から、生徒自身が中世の学習について「予想」を立てることを目標としている。「中世の暮らしと社会」では、まず13世紀末に制作された絵巻物『一遍上人絵伝』（『一遍聖絵』ともいわれる）の一場面「福岡の市」（以下、「絵」）を生徒にじっくり観察させ、鎌倉時代の民衆の生活を具体的につかませる。そのうえで、室町時代（16世紀末）に成立した『職人尽うたあわせ』（『七十一番職人歌合』ともいわれる）と関連づけ、そこに見られる商人・職人の姿や当時の商品を「福岡の市」の場面から探す活動を通して、中世を通じて人々の経済活動が発展していくことを予想させる。以降の中世の学習では、商人・職人による経済活動の発展が町のにぎわいを生むことを扱うが、その背景には産業・流通の発達があったことに気づかせたい。

なお、教科書p.68の「歴史の技」では、絵巻物の特徴や見方を『一遍上人絵伝』を用いて説明している。

### 本時のねらいと評価の観点

- ①「福岡の市」の観察から、鎌倉時代の人々の生活を具体的に知る。【知識・技能】
- ②絵画資料の観察・比較から、中世を通じて経済活動が発展したことを予想する。【思考・判断・表現】

### 授業展開例

基本的には教科書 p.60 下の問い(Q1～3)の流れに沿って学習を進められるが、生徒が取り組みやすいようにより具体的な問いを補うことも考えられる。まずは、章扉の年表（教科書 p.59）で『一遍上人絵伝』、『職人尽歌合』の制作時期を確認させたい。

【Q1：一遍は何をしているのでしょうか。】  
〈具体的な問い：一遍は何をしていますか。「絵」を観察してどんな場面が描かれているのか、説明しよう。〉

ここでは生徒の想像を大事にし、生徒が「絵」のどの部分に注目して想像したか、という根拠を示すことが

できればよい。なお、詞書からは次のように場面を解釈できる。

一遍の前に立つ武士は、留守中に妻が一遍の教えを聞いて出家したことに激怒し、福岡の市まで家来を連れ追いかけてきた。一遍を見つけた武士は、まさに腰の太刀に手をかけ切りかかろうとする。その刹那、一遍は初対面の武士を指さし、正体を言い当てた。すると、たちまち武士の怒りは消え去り、出家した(出家の場面は、絵巻を左に読み進めていくと描かれている)。

【Q2：市では何が売られているでしょうか。また、「絵」の中で右の①～⑤の職人と関わりの深いものを探してみましよう。】

〈具体的な問いⅠ：市で何が売られているか観察し、どのような使われ方をしたのか考えよう。〉

班で協力して読み取らせた後、発表させたい。直接描かれている商品以外にも、存在が推定できる商品を発表させる。高足駄(「絵」の人物は裸足か足半である。高足駄は、足を汚さないよう雨天や用便時に使用した)、足半(短くかかと部分がないので動きやすい草履)、布(反物・布袋・衣服・かぶり物)、米(豆・麦にも見える)、鳥、タコ(干し鮑)、魚(切り身)、お面(祭りでの使用が推測できる。教科書 p. 82・88 資料①に、仮面をかぶり踊る田楽が描かれている)、酒(立てた大甕の中身を想像させたい。酔の可能性もある。桶職人[教科書 p. 83 資料⑤]に掲載)が登場し木樽が生産されることで、酒や醤油の大量生産・輸送が可能になり酒屋が栄えた)、容器としての大甕。この他に、ひもで通した銭(宋銭)を手を持つ男、掘立小屋の中に座り、銭を数える女性が描かれ、宋銭の流通を読み取ることができる。

〈具体的な問いⅡ：品物はどのような方法で市に運ばれたのか、「絵」から探そう。〉

天秤棒で担ぐ、舟(川は、岡山県の吉井川)で運ぶ。教科書の図版ではトリングの関係で読み取れないが、「絵」では舟のさらに下に、馬の背に荷物を載せて運ぶ様子が描かれている。中世には馬借(教科書 p. 82 資料③参照)という業者が現れる。

〈具体的な問いⅢ：中世には品物を作って暮らす職人が登場します。室町時代に描かれた『職人尽歌合』から抜き出した①～⑤の職人・商人の姿や品物を、「絵」から探そう。〉

※以下、番号は『職人尽歌合』における番号。なお、

①・③は教科書 p. 89 資料③・④も参照。

①米売り(左の女性は豆売り)：35 番、②魚売と蛤売：15 番、③機織：4 番、④足駄作：22 番、⑤材木を運ぶ筏師：42 番である。

【Q3：中世にはどのような人々が活躍したのか予想してみましよう。】

〈具体的な問い：「福岡の市」で売られている商品、人々の服装・持ち物などから、中世にはどんな職人・商人が登場し、活躍していたか予想しよう。〉

ここでは、生徒が「絵」の中に根拠を見出し、自分なりに説明できることを重視する。東京国立博物館のウェブサイトで「職人尽歌合(七十一番職人歌合)(模本)」を検索すると高解像度画像で見ることができる。烏帽子折(成人男性のほとんどは烏帽子をかぶっている)、番匠(大工)、鍛冶(「絵」では武士が太刀・打ち刀を持つ)、酒作、弓作(「絵」では従者の侍が手に持っていた弓が消されている)、琵琶法師(「絵」では琵琶を演奏する男がいる)、田楽、猿楽、包丁師、白布売などが掲載されている。

## 図版解説と参考文献

『一遍上人絵伝』は、13 世紀末に描かれた絵巻物で、時宗の開祖である一遍の遊行の様子が描かれている。教科書 p. 60 に掲載されている部分は、備前国(岡山県)福岡の市の場面である。国立文化財機構のウェブサイト「e 国宝」で精密画像を見ることができる。書籍では、小松茂美『日本絵巻大成(別巻)一遍上人絵伝』(中央公論社、1978 年)の紙面が比較的大きく(図版縦 250 ミリ、原本は縦約 380 ミリ)、各場面の解説もつく。ただし、詞書の現代語訳はない。

『職人尽歌合』は、1500 年ごろに成立したとされる絵巻物で、職人を題材とした和歌と絵が収められている。「職人」という言葉が、「特別な技能・技術を持ち、品物をつくる手工業者」を意味するようになるのは近世以降である。中世では、下級荘官、芸人、商人、僧侶、獵師なども「職人」に含まれていた。古代に貴族・豪族の支配を受けながら手工業品を副業として生産していた農民が、中世になると「職人」として自立し、経済活動を始める。こうして誕生したさまざまな「職人」を描いたのが各種の「職人歌合」であり、時代が下るに従い職種が増えていく。